

富士川舟運が華やかかりし頃の峡西地方の賑わいは、単に懐古的な思い出だけではない。かつての三河岸のひとつ鵜沢(鵜沢町)や青柳(増穂町)はもちろん、駿信往還一の町場の賑わいを見せた小笠原(南アルプス市)など、圏中の中心・甲府にも負けない繁華な町場もあった。明治36年(1903)に中央線が開通するまでは、甲州と外をつなぐ物流の幹線は富士川舟運だったし、人の足もまた富士川の下りに頼ることが多かった。それぞれの町の繁栄の名残りは、昨今の町村合併にも微妙な影を落していた。後に「清吟書屋主人」となる村松健齋の若き日の旅日記にも、行きは富士川を下り東海道を経て東京へ、帰りは甲州街道を歩いて来る様が克明に記されている。現存する村松邸の成立は、農業を基盤に名主として活躍し様々な商売に手を出し始める、当地に限れば、村松家の繁栄が最も目に見える幕末から明治前期にかけての激動の時代に当たる。

村松邸は旧櫛形町桃園、かつて駿信往還と呼ばれた国道52号線とボロ電(峡西電鉄)の廃軌道に挟まれた一郭にある。鬱蒼とした桃園神社の前あたりから、今は地区のポケットパークぐらいいしか見えないが、やや南に隣接する当家の私寺「顕信坊」を含む一帯がかつての当家の敷地であった。漆喰塗の商家蔵、奥にある文庫蔵とともに、まず多くの人々が驚くのは、主屋一階西部を占める書院造りの美しさだろう。奥座敷の十畳間の壁は黄金色の金箔と綺羅唐紙に西日射す繊細なまでの格子戸、違い棚には霞舟の名のある花鳥画、同じく脇座敷には瑠璃色の壁と障壁画、いずれの間も



人がつくる家・家がつくるドラマ Yot's

駿信往還

残骸から現れた幻

村松邸・清吟書屋

昔日の繁栄を内に秘めながら、ひっそりと佇む家がある。駿信往還の傍らで村松家累代の家運を支えた続けた家。廃屋とおぼしき、忘れ去られた残骸から甦った家に、かつて「清吟書屋」と呼ばれていた、夢の一室があった。

- 場所 村松家住宅「清吟書屋」
(内主屋山梨県南アルプス市桃園615番地)
- 竣工 慶応元乙丑年十月(1865)
- 設計 村松健齋(儒学医)
- 施工 棟梁一若林齋藏源治知
(下田原村(旧中富町下田原)大工)
- 構造 様式
木造2階建て日本瓦葺き越屋根付
(大黒柱十差物構造「木造剛構造」)
- 用途 主屋一複合的多用途
1階 住居十村役人十診療所、
2階 寺子屋~実学学校十薬草乾燥等

高橋辰雄(美術家) 文
text: Tatsuo Takahashi
久保田陽一/撮影
photograph: Youichi Kubota



釘隠しに橋と瑠璃鳥の細工物。庭につながる広縁は、銀鼠色の砂織帷壁に家紋の「梶の葉」が型抜き漆喰で施され、細部にまで心配りが行き届いている。ここ

が後々まで「清吟書屋」と呼ばれる書院、多くの政治家、商人、そして文人墨客を招き入れた、いわばサロンをなしていた空間である。二階は時代の変遷により改築を重ね、教育や医療、また養蚕と様々な使われ方をされてきたと思われるが、なにより南北8箇所、擬洋風のアーチ型の窓の意匠が、明治開化期の闊達な気運を現わしている。屋根裏の大柱の棟札には、村松健齋により「慶応元乙丑年十月（1865）」と記され、建造の時を証しているが、残された古図や風水図には、さらに時代を遡るものがある。

かつて、甲府盆地の西方に位置するこのあたりは「原七郷」と呼ばれる水の乏しい風土であった。桃源郷を思わせる今の風景からは想像もできないが、御勅使川の扇状地に広がる砂礫の原野に点在する、上八田、西野、上今井、桃園、吉田（十五所、沢登）、小笠原、在家塚などの村々は、雨が降らねば旱魃、降り過ぎれば洪水となる水との闘いを強いられてきた。寛文年間（1661〜1673）以来、御勅使川の水を利用した徳島堰の開鑿で水利の改良が図られたが、抜本的な解決は約三百年後、戦後の野呂川水源の開発と釜無川右岸土地改良事業の完成まで持ち越された。

稲作の乏しさは山国・甲州全体に言えることであったが、山に閉ざされながらも当地が街道筋に立地し、商業の発達とともに遠地と頻繁に交流する流動性を持ち合わせていた



調査の後、最新の技術で修復した書院。奥座敷の黄金色の輝きと前座敷のラピスラズリーの深みが対比し、商家とは思えない華麗な意匠が異彩を放っている

ことも、また見逃せない。早くから商いの気風を培っていたのが地域の習いであつたらう。古く武田信玄の時代から伝わるという「曝し柿野売り」を許す書状が村松家に残されている。わずかの田畑に米や雑穀、桑、野菜を育てながら、やがて煙草、木綿が換金作物の主流になり、商品経済の発達とともに村中の生産力も増してゆく。そして明治維新を迎え、養蚕と生糸が地域経済に大きな比重を占めるようになる。資本を蓄積した豪農層は広く外の世界に目を向けるようになっていった。

村松邸建設の基盤は、なにより幕末動乱期を長命にして生き抜いた村松伊助（1798〜1876）の活躍によるものだった。年とともに組頭、長百姓、名主と村内でも重きをなし、かたわら酒造や面替など、たふんに商家的な営みにも手腕を見せた村松伊助が、村中の医家である勝家から健齋を入婿に迎え大きな展開を見せる。「櫛形町誌資料編」には、天保9年（1839）「天保騒動に関係する出金始末書」、文久元年（1861）「和宮下向助郷頼末」等に名が見られ、長く家長の地位にあったことを窺わせる。

村松健齋（1826〜1885）は、文政9年（1826）に村内の儒医・3代勝格弥（本堂）の次男として生まれ、兄・4代勝格弥（開堂）とともに、外科に長じ広範な活躍を見せる。後に村松家に入婿、「清吟書屋」を実質的にデザインし商家、医家を継いで活躍、長らく「清吟書屋主人」と呼ばれた。健齋が使用したと思われる家紋入りの立派な「葉種箱」が今なお残されている。明治11年（1878）の県令・藤村紫郎宛「桃園より明徳事務所移転促進方願い」には、村惣代として勝格弥、村松健齋の署名があり、両家の村内での地位が窺わ



れる。同じ年、金融貸付会社を蝕沢に起こしたり、翌年には、生糸取引で活況を見せ始めた開港まもない横浜の横浜正金銀行に出資し事業家としての活躍が始まった。やがて子の代まで深く付き合う在家塚出身の若尾逸平(1820、1913)ら、先行する甲州商人の活躍は大きな刺激になったに違いない。

両家の約束だったのだろうか。村松健齋の長子・琢太郎は嘉永4年(1851)に生まれ、後に父の生家・勝家に入婿し、5代勝格弥(公堂)(1851、1907)となった。転換期の儒医として、また新津真らとともに峡西の民権家として活躍、『臨床応用 硯北日誌』を残した。『峡中自由諸名士略伝』の最後に名を連ねるのは、この勝格弥である。明治6年(1873)、蓮経寺を仮用して創設された桃園学校(後の桃園尋常小学校)では、若くして初代校長を務め、明治20年(1883)からは明穂村戸長も務め、県下の政治にも重きをなした。『臨床応用 硯北日誌』は明治8年(1875)から8年余にわたって書かれた貴重な記録である。山梨と東京の間を、また勝・村松両家の間を忙しく行き来する様子が克明に記されて、家内の雰囲気まで詳しく知れる。例えば、明治13年(1880)6月22日には、明治天皇の御巡幸を見るため上諏訪渡船場に赴き、同11月25日には、甲府の亀屋座に自由党板垣退助の演説を聞きに行っている。とりわけ印象深い記述は、明治16年(1883)元旦に、「漢医道を挽回する事、立憲政体に尽力する事、早川開鑿の結果をなす事、家産を豊かにする事」など四項を挙げ、年頭の決意を新たにしていることである。一帯の水源地確保がすでに克服すべき大きな課題であったことが日誌からも窺える。幕藩体制下の甲州には、確かな武士階級はいなかった。維新後の自由民権運動の担い手は、このような若き豪農層の俊才たちであったようだ。

その後の村松家の発展は、村松健齋の次男として文久3年(1862)に生まれ、村松家を継いだ村松正次郎(1862



南側から見た主屋二階の窓。明治初期のハイカラな気分を感じさせる

51924)による。父・健齋の大きな後ろ立てがあったのだろう。若くして上京、山岡鉄舟に学び、また兄・勝格弥も学んだ島田重礼(葦村)の雙柱精舎で漢学を学び多大な影響を受けた。やがて明治10年代には、嘉納治五郎の講道館に入門し免許皆伝を得たり、土佐出身の軍人政治家・谷干城の書生となり、明治法律学校(後の明治大学)にも学んだ。この縁故が、正次郎は晩年になるまで、後年国粹主義的傾向を強めた杉浦重剛らの活動に資金援助を続けたという。正次郎が活躍し始める明治の前半期は、まさに近代日本の揺籃期、しばし通信省に勤めた後、山梨と東京、横浜を行き来する活躍が始まる。財閥をなした若尾家とは比べられないにしても、その心意気は重なり行動を共にしたことも度々あったのだろう。

親子ともに親交を重ね、長命だった若尾逸平の死後は正次郎がその墓碑名を書いたという。そして、大正、昭和となると、村松伊助、健齋、正次郎と三代にわたって築かれてきた村松邸は、故郷に残され、多くの大家と同様、資本の投下と活躍の場は次第に山梨を離れていた。

修復に取りかかった頃、後を取られている並木昭子さんから『廃屋』と題する一枚の水彩画を見せていただいた。戦争を前後し同地に疎開していた画家の滝沢忠三氏が戦後まもなく、ボロ電の桃園駅ホームから描いた当屋の風景であった。「佃(ニンベンゲチ)の家」と近所では屋号で呼ばれていた家屋敷を大木が囲繞し、今にも倒れんとする塀囲いは棒で無造作に支えられている。いかにも没落寸前の大家の雰囲気、あたりに曝された大家の気分を画家の目は、したたかにとらえたと見える。しかし村松邸には、戦中から戦後ひと時にかけて、主人一家が住み着いていたことがあった。他人の目からは、廃屋かに見えたその家には、都会を逃れてきた次代の村松重雄夫妻とその子ども達が一ひっそりと暮らしていた。娘のひとり、並木昭子さんも巨摩高女に通いながら、夢多き思春期を迎えていた。

修復なったばかりの商家蔵全景。国道の拡幅により若干の移動を余儀なくされた。往時の店前の賑わいを感じさせる



百数十年、数代にわたる物語を聞くのは、もはや煩雑に過ぎるかもしれないが、現在の村松邸を語るのには、どうしてもこの村松重雄さんに登場してもらわねばなるまい。時代はぐっと今に近く、現在の跡を取る娘達の父に当たる。村松重雄（1896〜1972）は、正次郎の長男として明治29年（1896）に生まれた。父・正次郎は、どこへ行くにも幼い重雄を同行し、重雄もまた伊藤博文はじめ政財界の重鎮と度々会ったことを覚えていたという。学業も実業家としての薰陶も、父の敷いたレールに従ったまでだが、やがて向かう大正・昭和は、父が生きた日清、日露の明治とはまた大きく違っていた。父から莫大な資産を受け継ぎ、幾多の会社の経営にも名を連ねたが、そう積極的ではなかったようだ。残された写真からも、父とはまた違った方向を向いている風貌が窺える。第一次世界大戦が終わり、時代は大正デモクラシーからモボ・モガの昭和へと向かう。まず最初に着手した重雄らしき事業は、洋書専門の輸入商社「大同洋行」。そしてまもなく、神田のずずらん通りにレストラン「mädchenメッチェン」を開店させた。

学生や文化人が集う神田神保町に誕生したモダンな洋食店、店内には最新のプレーヤーが置かれ、洋楽のクラシックや流行の音楽が流された。幼かった並木昭子さんも度々訪れ、おいしいアイスクリームの味と白いエプロン姿のウェイトレスを今でも覚えているという。やがて戦時期に向かう時代、レストランの行く末がどうなったかは予想がつく。まもなく閉店、残された食器、調度も看板もすべて桃園の村松邸の納屋に積まれることになった。現在見られる村松邸玄関の美しいカットガラスの引き戸は、かつて多くの客を迎えたもの、当時としては珍しいラワン材製、風呂場の窓に嵌め込まれたステンドグラスも、かつて店内の装飾に使われていた逸品であるという。

数年前、関係者の目の前にあったのは、巨大な残骸であった。それはいかにも古めかしくやっかいなものであった。かつて暮らしを飾り立てていた装飾や道具、貴重な文献や書画、骨董が散逸してしまっただけでなく、知る家人にとっては、複雑な思いであつたらう。しかし、話を重ねて聞くにつれ、



上/様々な工夫が施され修復された軒先と広縁
右/住居の記憶から地域のこれからのあり様が見える。自作の年表を作り上げた建築家・久保田要氏



二階大柱に張り付けられた百数十年前の横札
「メッチェン」店内を飾っていた昭和初期のステンドグラス

私には、よくここまで残った希少な事例だと思えるようになった。目に見えているものは、これだけであるにしても、そこには百年、二百年あるいはそれ以上の時間が凝縮されている。それぞれの想像力が試されていると、やがて気付いた。

現在、登録有形文化財に指定されている村松邸（村松家住宅&商家蔵群等）の復元修復工事は、平成12年（2000）から数年がかりで進められてきた。まずは埃を洗い流し、覆っていたトタンを剥がして修復が始まった。時に曳屋による大掛かりな蔵の移設作業も加わった。在地の大工、左官や屋根職人だけではない、特殊な飾り金具の再生や書院壁面の修復には遠方から専門技術を持った職人がかけつけ、熟練の技を惜しまず提供した。素材から細かな技術まで、修復の過程がまさに未来に向けた保存のあり方を問う実験でもあったのだ。

ようやく全貌が見え始めてきたのは、昨年の三月も後半になってのことであった。周囲の住人も道行く人も、囲いを取り払われ姿を現わしたばかりの新たな景観に目を見張った。それは家人はじめ関係者として同じことだ。それぞれが長らく記憶のなかで温めてきたイメージであったからだ。朽ち果てるにまかせられていた、あの埃だらけの旧宅を知る人なら、この数年の労苦を思い出しつつ、まさに、残骸から現れた幻に見えたかもしれない。ざっと見ても百数十年の歴史を重ねた村松邸は、建物の復元とともに、幕末から明治維新へ、そして戦前から戦後へと続いた村松家の数代にわたる物語をまた甦らせることになった。

※参考資料

「登録有形文化財村松家主屋・商家蔵保存修繕報告書」「同村松家年表」（久保田要）、「櫛形町誌」「櫛形町誌資料編（櫛形町）」「臨床応用・視北日誌（上）」（勝格田要）、「甲州備医列伝」（村松学佑）、「峡中自由諸名士略伝（長坂啓三）」（山梨県自由民権運動における佐野広乃関係文書（一）〜（四））（甲斐路「NOGUCHI」連載）「佐野広乃・郷土史にかがやく人々第4集」（酒井常春）「やまなし明治の幕後」山梨県の百年（有泉貞夫）、「山梨県の歴史」（磯貝正義、飯田文弥）等
*取材では、村松家を継ぐ並木昭子さん、村松啓子さんから多忙ななか数度にわたってお話を伺うことができました。また調査と設計監理、修復工事に当たっていた久保田一級建築士事務所久保田要のスタッフ、工事関係者には大変お世話になりました。また、一部写真も提供いただきました。厚くお礼申し上げます。